くくり罠を用いたシカの効率的な捕獲方法の検証

四国森林管理局　安芸森林管理署
係員　武市　泰典
大井森林事務所　係員　小杉　陵太

１　課題を取り上げた背景

分布の拡大を続けるニホンジカ(以下シカ)の食害により、公益的機能を十分に発揮することができない森林が四国各地で見られています。シカの生息域拡大に対して、四国森林管理局ではシカ防護ネットや単木保護チューブといった造林木の保護手段と、箱罠や囲い罠といった個体数増加防止の手段をとっていますが、依然として個体数低減にはつながっていない状況です。

当署では個体数調整の手段の１つである「くくり罠」に着目し、安芸・入河内森林事務所で試行した「くくり罠」によるより効果的な捕獲方法を紹介します。

くくり罠設置の様子

２　くくり罠の利点

金額面で比較した場合、箱罠、囲い罠の費用は54～150千円程度で給餌やメンテナンスが必要です。また、猟銃についても弾の費用や保管場所、猟犬の育成など、購入・維持費用も継続的にかかるため高価になりがちですが、くくり罠では設置の際の手間を除けば1個当たりの費用が６千円程度であり、破損時の修繕・交換以外のランニングコストが殆どかかりません。また、罠を用いてシカを捕獲した場合、周囲の個体の警戒心が高まるため、罠を別の場所に移設する必要があり、この点でも持ち運びが容易で設置場所を選ばないくくり罠に利点があります。

３　捕獲方法の検証

くくり罠で捕獲されたシカ

くくり罠を使用してシカを捕獲する場合、いくつか手順を踏む必要がありますが、なかでも、けもの道を発見し、その上に罠を設置する「設置場所の選定」が特に重要です。また、設置した罠周辺の様子をカメラトラップで確認したところ、匂いによる情報と罠周辺の乱れを警戒していることがわかりました。

そのため、「罠の設置箇所周辺を乱さない」、「罠の上に蹄の跡を描き、実際に通ったように見せかける」といった狩猟経験のある森林技術員の経験と観察に基づいた工夫によってシカの捕獲数がどの程度変動するか調査を行いました。

４　結果と考察

平成28年度より、くくり罠の設置を開始しましたが、平成27年度の当森林事務所の捕獲頭数が25頭だったことに対し、28年度は箱罠含め45頭(内くくり罠での捕獲23頭)、29年度では81頭(51頭)と大幅に前年度の捕獲実績を上回る成果を得ることができました。

この理由として、くくり罠はシカの行動パターンに合わせて場所を選ばず設置ができ､平成28年度に得られた結果を基に森林技術員と共に検証し、試行錯誤しながら捕獲技術を向上・確立させた結果であると考えられます。さらに、狩猟未経験者である私自身も基本の狩猟規則から始め、これらのノウハウを現地で学ぶことで同様の結果が得られたことから、初心者でも適切な指導を受けることにより一定の成果が得られるものと考えます。

また、平成30年度から高知県工業技術センターと共同研究中の IoT を活用した罠見回りの省力化技術の開発の結果を合わせて今後さらなる捕獲技術の向上・普及に努めていきたいと考えています。